

## 葉集を読む

松岡 隆子

サーカス来る月下美人の咲きし夜 安達みわ子

夏の夜、純白で大輪の花を開き数時間後には萎んでしまう月下美人は、その芳香と共に一夜の夢の世界に誘ってくれる花だ。サーカスも私たちを非日常の夢の世界に誘ってくれる。空中ブランコ、綱渡り、人間アクロバットなど超人的な技を駆使した華麗なショーや、ライオンや虎、象などの猛獣ショーなど、次々と繰り広げられるショーに場内は興奮の坩堝と化する。そのサーカスが明日は町にやってくる。サーカスを待つわくわく感と、月下美人の開花を待つわくわく感の、取合せの妙に注目した。

百日紅いつから咲いてゐたのやら 鈴木 富代

言われてみると百日紅は、いつの間にか咲いている感じがする花だ。庭木として毎日見ていれば開花に気が付くかもしれないが、街路樹の場合などある日急に咲いていることに気

づくことが多い。花期は長く七月から九月まで咲き通す。咲き始めると次々に咲き一気に満開の状態になるようだ。夏の季語になっているのは、中国南部の原産でもあり、漢名からしても盛夏に相応しい感じがするからであろう。

シャーベット夫のつばやき照れくさし 三宅まどか

いつもの喫茶店で向き合ってシャーベットを食べる。夫はいつものマスカット味、自分はレモン味、などと勝手に想像してみた。「あの時は……」と夫がぼつりと呟く。呟きの内容はさすがに想像できないが、作者のはにかんだような表情は何となく想像できる。果汁やワインなどを凍らせたシャーベットはアイスクリームに比べると大人っぽい味がすると思っていたが、時には初恋の味がするのかもしれない。

同点のマウンド土の灼くるなり 西島 美晴

一読、夏の甲子園を詠んでいることが分かる。毎年八月に甲子園で行われる全国高等学校野球選手権大会の熱戦はテレビや新聞で報道され人々の関心も高い。

追いつ追われつの試合はいま同点となった。マウンドの投手へ、バッターボックスの打者へ、応援の声が一層高まる。灼けきったマウンドの土がじりじりと熱い。省略を尽くした表現が一句の緊張を高めている。

休耕の田へ渡り来る青田風 小泉 恵子

以前は減反政策により止む無く休耕田となるケースが多

かったようだが、現在は農家の高齢化や後継者が居ないことにより休耕田となるケースが増えているようだ。ぼつりと取り残された休耕田に青田の風が吹きわたっている様はどことなく侘しい。放置された休耕田は草が茂りだんだん荒れていくことだろう。実景を写生した句であるが、その奥に休耕にせざるを得なかった淋しさが思われ切ない。

川幅を広げてなほも梅雨出水

野尻 敏子

降り続く雨に川はみるみる増水し濁流がついに堤防を越えた。洪水の一瞬がなまなましく描写されている。野尻さんが住んでおられる山口県美祿市は六月の豪雨で厚狭川が氾濫し、各地に浸水の被害がでた。一部で橋が崩落し美祿線が不通になった。美祿線は山陽小野田市の厚狭駅と山陰の長門市駅間を走るJR西日本の幹線で、山陽小野田市には古くからの誌友晴涼風さんがおられる。幸い晴さんも美祿在住の三人の誌友の方も被害はなかったと聞いて安堵した。美祿は私の郷里でもある。そのうち晴さんも交えて美祿で句会を開きたいと思っていた矢先の厚狭川氾濫のニュースに心が痛んだ。

体温を超える気温や凌霄花

武田美紗子

九十年生きて今年の暑さかな

桑原 和子

35度を超える猛暑日が何日も続いたり、九月になっても真夏日が続くなど、今年の異常な暑さには誰もが悲鳴をあげている。最高気温が39度や40度と聞くと、それだけで息苦しくなる。

一句目の武田さんは、炎天に猛り咲く凌霄花の朱さに、体温を超える気温の危険を感じている。

二句目の桑原さんの、九十年の間これ程の暑さは経験したこともないという言葉には実感が籠る。

過去120年で最も暑い夏と云われる異常な暑さを、それぞれに自分の視点で捉え今日の一句としている。

床屋には似合はぬ花やアマリリス

野原 洋子

まっすぐ伸びた太い茎に鮮やかな色の花を咲かせるアマリリスは華麗でインパクトがある花で、庶民的な床屋のイメージには合わないかもしれない。だが考え方によつては、床屋にアマリリス、というのも新鮮な感じだ。店が明るくなりアマリリスを挟んで客との会話も弾むことだろう。似合わないと言いつつも作者自身アマリリスの華やかさに見とれていくようにも思える。

その他の印象句

川幅に螢飛びかふ山家かな

小田としゑ

なすすべもなくて畑の水雨かな

阿久津早智子

絵日記のための旅なり夏休

大山 玲子

打水や名人戦の白熱す

今西 知巳

洗ひ髪かわかすほどの嵩もなく

森田 道子

だんご虫丸まつてゐる酷暑かな

椎野 資子